

**乙訓圏域障がい者自立支援協議会  
令和元年度 第3回地域生活支援拠点部会 会議録**

日時 令和元年 11月13日(水) 13:30~15:30

場所 乙訓保健所 講堂

出席者 13名

基幹相談支援センター・キャンパス・乙訓ひまわり園・向日市社協障がい者地域生活支援センター・NPO 法人こらぼねっと京都・乙訓障害者支援事業所連絡協議会・乙訓若竹苑・乙訓福祉会・京都府立向日が丘支援学校(代)・乙訓やよい会・乙訓の障害者福祉を進める連絡会・乙訓保健所福祉室・長岡京市障がい福祉課

欠席者 3名

晨光苑・向日市障がい者支援課・大山崎町福祉課

事務局 2名

傍聴者 3名

配布資料 ・次第

・乙訓地域の地域生活支援拠点を整備するにあたっての提案(たたき台)

### 議事の流れ

#### 1 地域生活支援拠点機能の現状・課題・整備内容について

(部会長)

・地域生活支援拠点部会を始めます。たたき台になる提案を全員に回していただいて、意見を願いました。頂いた意見を反映させて、たたき台を作ってもらっています。これについて話をしていきたいと思えます。今日は5ページ(3)体験の機会・場のところを重点的に意見やコメントをいただきたいと思っています。

緊急時、何かあった時にどうするかというのが、いきなり利用者からワンストップでの電話対応では現実問題として無理があると考えられてきました。

日中の事業所や相談のところゴールかという、そこはスタートであってゴールではない。

そこから次につながっていくべき支援や機会が本当に足りないところで、各自もしくは本人、家族が自助努力の中でやっている場面もたくさん見られます。そこに手当てができるショートステイやグループホームの中の緊急の居場所等、そういう話をしてきたと思えます。具体的なプランはまだまだ詰めていけないといけませんが、そういうものがあるというところで提案していきたいと思っています。

ただ、そういうことをするにしても事前に体験をする場がなく、全く始めましてのところ何かあったからいきなり置いてというのは、本人にとっても負担が大きすぎます。意見の中にあつた重心の人達、重心であることに対する身体へのケアについてももちろんですが、その人達が安心して居れる場所、居

れる人的環境・関わりについてのノウハウもあまりない中でどうやってやっていくのかというところで、事前に知っている人や関わったことがある人、もしくは関わられた経験も含めて体験の機会というのはすごく重要だということまでは前回の話の中でも触れてきました。

それ以降についての話をしていきたいと思います。

①国が示す機能、これは家族が見れなくなった等の緊急事態というのではなく、普段の中で自立に向かって色んなことができる体験の場を提供するというのが国が示しているところです。

②の圏域の現状でいうと短期入所やグループホームの体験等がほとんどできていない状況であるということと、引きこもりの人が家から出やすい環境、少し興味をむけられるぐらいのあまりハードルが高くないような場所や機会、もう少しふらっと参加できるような環境等そういうのがいるのかなと思います。この間の色んな報道等を見ても思うのですが、現状は皆さんご承知のことだと思うので、課題のところでこんなのがいるという何か具体的な意見があればお願いします。

学齢期の子どもについても放課後等デイサービスが非常に増えていることがイコール体験の場を増やしているとは言えない場面もあるような気がします。

逆に体験・経験をすごく狭めているのではないかと思える場面もあるので、学校からも先生方が思っ

いらっしゃることや先生方の話題にあがっているようなことがあればあげていただければと思います。

(委員)

・以前に比べて放課後等デイを利用する児童・生徒というのはここ数年増えています。事業所自体も増えてきています。ここ数年で一年生の時から利用されるというのが傾向として変わってきていると思います。医療的ケアの方を受け入れられるところも複数あるようになりました。

以前だと医ケアのお子さんは放課後等デイサービスに行かずにそのままお帰りになるパターンが多かったのですが、そういう方も利用することで色んな経験という点では放課後の過ごしについて幅は広がってきていると思います。それが今後どのように繋がっていくのかというのはまた別な問題だと思うのですが、児童・生徒の実態としても小学部の一年生の時からそういう経験を積んでいるというのがここ数年で確実に増えてきているという思いです。

書いていただいているような課題はやはりあります。その経験がどう繋がっていくかというのはまた考えていけないといけないと思います。

(部会長)

・放デイを利用することによって、逆に減少している体験、させてあげられない経験というのは学校で話題にはなりませんか。

(委員)

・そういう話題は出ていないです。

実態としてはそういう実態がありますが、特に話題にはなっていません。

(委員)

・学校の時に寄宿舎で通年入舎を一年間経験させてもらいました。今はグループホームでお世話になっています。その期間、親子が離れてどうなるかも実質体験できたことが、グループホームにお願いする時に私自身がすごく見通しが持てて、ああいう経験があるからきっと頑張っ

今グループホームに入りつつも週末は家に帰ってきます。寄宿舍でのリズムと同じような感じでやっています。寄宿舍というのはすごく大事だなと思っています。

もしそういうのがなくなってしまうと、今でさえショートステイ等がすごく少ない中で就学の人達の体験等も募集していくことを考えると大変だと思うので、そういうのはどうなっているのかなと思っています。

(部会長)

・学校の寄宿舍がどうなるかということよりも、今後の課題としてあげていきたいのは、学齢期に生活経験・生活訓練の場があるということが、その後の生活に生きる経験になるので、そういう場はほしいということです。

相談の方の話から考えると放課後等デイに行っていて寄宿舍に入ると放デイが使えません。

放デイの席が確保できないので寄宿舍に入らないという声を聞きます。逆に月曜から金曜まで寄宿舍で金曜日の夕方に放デイに行き、金土は放デイでみたいな生活になっている子は相談の場面で見かけます。月曜から金曜までは集団生活する中で、家の良さや家でほっこりする等そういうことを相談としては生活イメージを立てるのですが、フルに活用して家に帰ってこない暮らしを希望される親御さんも見受けられるかなと思います。

寄宿舍の体験はすごく重要だから放デイの席を確保するとかではなくて寄宿舍の体験はした方が良くと思う子でも、放デイの席がなくなるからおっしゃる方はいらっしゃいます。席取りになってしまっています。放デイではなく、違う生活体験をというお勧めをしても一旦やめると二度と使えなくなることもあるので、それは困ったものだと思います。

(委員)

・体験の場で、例えば西宮で言うと身体障がいの方が自立訓練みたいな感じのところと聞いたことがあるのでそういうことができれば良いと思います。

発達障がいの方が増えてきて京都市内のプエルタみたいに2年期限があり、大学部みたいなイメージがあって、そういうのが乙訓でもできたら良いという話も聞きます。

ただ、そういう方も寄宿舍利用できても、出てしまうとそういう生活体験ができるようなところが少ないので、そういう体験ができる部屋は西宮社協ではあまり稼働率が良くないとおっしゃっていました。

入りやすかったら逆にそういう引きこもりの方も利用できても良いのかなというイメージを持っています。

(部会長)

・生駒でも体験利用できるグループホームの一室がありました。

(委員)

・体験と一言で言っていますが、その人だったり状態、障がい特性によっても体験しないといけないことが違います。一人暮らし体験をしないといけない人なのか、集団での生活という体験をしないといけない人なのか、その後積み重ねた時にどこまでいけるのかというところの支援者側の方のアセスメントも兼ねた体験等、色々パターンがあると思うのですが、かなり漠然としていて難しいと思っています。西宮の賃貸での体験となると稼働率が低くなると思っています。そういう意味では乙訓圏域にはアスロードさんという自立生活訓練の泊まりの施設という京都府で唯一という施設があります。ただ基本的には精神の方の二年間という限定での利用になっていますが、それ以外の体験の場というのは極端に

不足しているなあと思います。

(部会長)

・障がいの状況や現状に合わせてステップアップというのはそれぞれが違うので、体験というのはものすごく多様だと思います。多様な体験をひとつくりにして体験の場を作ると言うのはちょっと乱暴だと思います。提案というか、今年度のまとめの中でどんなスモールステップの体験の場が計画できる、企画できる相談の場等使えるものがあつたら良いという気はします。

ここは具体的にあげていくことで、まとめに反映させていきたいと思います。たぶん、体験のイメージは全員違うと思います。例えばグループホームを全く知らない人だとグループホームに行って、晩ご飯を食べて帰ってくるだけです。

普段、家で自分のペースで好きにご飯を食べているところから、寄宿舍に行った経験のある人はそういうご飯の場をある程度体験していて、それだと思えるのかどうなのか。それが全然経験がない人だとその違いに、泊まる等それ以前の問題として、晩ご飯を食べて帰るだけというのものもあるだろうし、グループホームから一人暮らしに移行するところと言うと、グループホームはドアを閉めても家の中には何人かの人があります。生活音があるのですが、全くの一人暮らしというのはドアを閉めた状態で一人です。集合住宅だと他の部屋の物音が響いてきても、それは自分の暮らしとは直接関係がないので不安になっても安心材料にはなりません。一人暮らしするなら、ドアを閉めたところで一人だと、一人で寝るんだというところからやっていかないといけません。

京都市内等で今一人暮らし体験に向けてのヘルパー派遣等が柔軟に活用されている事例は聞きます。

一人で寝れるまでに何日間か親が泊まるということをしながらか移行していています。

家で暮らしていた人がグループホームを経由せずに、いきなり一人暮らしという事例もあります。

それで言うと買い物に行く、買ったものを自分で持って帰って冷蔵庫に入れる等、どこまで自分であるのか、ヘルパーとするのかというような体験から、ガイヘルの買い物ぐらいの体験をしておかないと、放課後等デイが増えてきた分、ガイヘルの依頼は大きく減っています。

外出先とか活動内容を親御さんと一緒に考えていかないといけないという作業が入るので、放デイだと皆でやってくれるので、個人として何をするかという外出支援の依頼はものすごく減っていると思います。その体験を保証してあげられるようなことを考えておかないと、そのまま延長線上でいくと入所施設と同じことになってしまいます。入所が悪いわけではないですが、地域で暮らすということでグループホームやアパートでの一人暮らし、もしくは自宅での一人暮らしもあります。一緒に暮らしていた家族が、逆に老人ホームに入るということで家族の数が減り、兄弟が出られることになると、本人が自宅で一人暮らしとなり、そこで何をするかという体験的学習というのはあると思います。

そのようなことを考えると、この地域生活支援拠点の中にそういうサービスを提供できるような仕組みみたいなものも本当はほしいと思います。ノウハウ、研究部門と言う言い過ぎかもしれませんが、ノウハウも提供できるようなものがあれば良いという気はします。

放デイ、外出支援、身体介護等の派遣をしていて、実態として感じるところです。

家でその子と過ごすというホームヘルプが極端に減った気がします。

(委員)

・うちの放デイを使っている人は5時から送迎をして、一番遅い人が家に帰るのが6時ぐらいです。通所施設だとありえないです。下手すると4時過ぎには帰ってきます。そのタイムラグの2時間をどう

過ごそうかと今から悩んでいるお母さんがおられるというのは聞いています。

常に誰かが一緒にいるという経験は多いですが、一人で過ごすという経験が少ない方もおられると思います。そういう経験を作っておくことも必要だと、入所が良いとは思わないのですが、入所するのであれば、自分一人で過ごせる人を優先したいというのは入所施設の職員から聞いたことがあります。

常に人が横にいなければならない、一人を独占するような人は入所施設としてはすぐには受け止められないと聞いたことがあるので、一人で過ごせる時間というのは、うちのグループホームでもそれが基準になってしまい、お断りした時もあるような気がします。

(部会長)

・日中活動も通所もそうです。

(委員)

・日中はできるだけ一人で5～6人見れるような職員の力量と、利用者もその方が安心できる人がグループも組めるし、発作のある人だったら常に付かないといけない人もいます。そのバランスです。

(委員)

・今の話で、知的の障がいの方が施設に行った時、長岡京市の人はやりやすいです。なぜなら療育がされています。すごく重度で色々なことがあったとしても、この子は覚えられますとか、そこはすごく重要なんだと思います。

(委員)

・午後に見通しが持たなくて不安になることがあるから、そういうところで基礎ができている気がします。

(部会長)

・ハード面で物がほしいだけと言ってしまうのですが、ソフト面も今すぐに言葉が思い浮かばないけれど何かいるのかなと思います。町の中を歩けない子が増えたというのは大人の施設の通所型の人達から全国的に聞きます。車移動が基本の地域はあまり変化は見られませんが、電車移動や徒歩移動が普通である地域だと歩けない人が増えたということです。前から人が来た時によける、道を渡る前に止まるという所作や動作がうまくいかない人が増えたから外出が難しいというのを聞くようになりました。

(委員)

・どうしても短期入所の状況や体験型グループホームの位置付けで考えた時に、数の問題ということはどうしても考えてしまいます。ノウハウ、ベースというのをここで積み上げる形をとったということを考えて上でやっていく形にしないと、例えば地域生活をしてもらうためのハード面をここで解決なんて絶対にできないので、そういった視点での目的、目標という形を位置付けて、この地域生活支援拠点ということを考えていった方が良いでしょう。

発達障がいベースになって引きこもっているという話も聞くのですが、一歩が出にくかったり、障がいの程度によってはいきなり就Bみたいな話になっても、集団の中いきなりは行けないというケースもいっぱいあります。もう少しハードルを低く、ちょっと出て人間関係を構築するような場所があっても良いのかなと思います。

(部会長)

・今、地活とかがその役割を担っていると思うのですが。

(委員)

・Ⅰ型のアンサンブル、Ⅱ型で若竹苑と聴言デイ、Ⅲ型でやまびこぐらいだと思います。Ⅲ型はにおいてという形になるとⅠ型は障がいがあればという形で受け入れてくれているので、うちは受給者証を出していません。Ⅱ型、Ⅲ型のみです。Ⅲ型は旧共同作業所等の移行しなかった人達なので基本的には若竹苑や聴言デイ等のⅡ型になってきます。

(部会長)

・どちらかと言うと地活の機能に近いですか？

(委員)

・そういう人を受け入れますみたいな場所をアピールするではないですが、そういう場所があっても良いのかなと思ったりはします。

(委員)

・引きこもり支援として長岡京市ではバスハウス、乙訓もも等がやっていますが、人数が多いから、人間関係でだめになってという人もいらっしゃいます。ふらっと行って、興味があったから来ましたというところだとキャンパスがやってくれているようなカラオケ等のイベント、常時ではないですがフリーで入れるので、そういう場もありなのかなと思います。

ケースワークの中で外に出れない人達、引きこもりに特化するとどうやって出てもらうかというのは悩ましいところです。何か本人の興味を引くようなものが月に一回あるよ等、そういうことでいきますが、それでやっていくとすごく時間がかかります。そういう体験の場やコーヒーを飲みに行くだけでも全然違うと思います。誰でも出やすい、行きやすいという場所があると良いのかなとは思いますが。

(部会長)

・時間帯ですが生活のリズムと体のことで、特に薬を飲んでいる方は午前中かなり動くのが厳しくて、午後から夕方帯にかけての方が動きが良いという方もいます。地活の開設時間帯等も京都市内は夜の地活をやっているところがあります。日中は通所に行って、その後、アフターファイブの活動の場所として夜の地活を活用するというような、時間帯に余裕を持たせられるというのがあっても良いような気はします。

(委員)

・若竹苑で地活をやっています。夜の時間帯はやっていませんが、昼間も柔軟な使い方をされている方はいます。起きてから10時ぐらいに来て、3時で早く帰られる人とか、そういった柔軟な利用をされる方はおられます。型にはめない形、自由な使い方という意味ではそういった地活センターの役割としてはあるように思います。その中で生活訓練という要素も多少は入っているので最初はそういうフリーな使い方から入って、徐々に仲間との関係を作っていく、通常のサービス利用時間ぐらいまで利用ができるようになって、就労、生活介護等そういった事業に乗っかっていけるまで持っていきたい人を次送り出すところまでが仕組みとしてまだ整えられていません。

そういう体験もある程度柔軟性とその人にあったところからスタートできていくような場所であれば、使える人が増えていくのかなと思います。

(委員)

・体験イコール通過型でないと、体験のままずっと止まった方が楽です。そうではなくて、その人にあった、身につけたもの等を持ってステップアップしてもらうのが一番良いと思います。

(委員)

・グループホームの体験のために比較的軽度の方が希望されたのでプランを書いて利用していただいたことがあります。体験されると、それで満足されて、結局次に繋がられなくて終わってしまいました。体験できて良かったで終わってしまっているの、それでは意味がなさないと思っています。そこから次どうしていかに結びつけられるような形を考えないといけないという反省もあります。

(部会長)

・やってみて満足、納得というのが通過だと思います。次にステップアップ、体験前の暮らしと体験後の暮らしが外から見たらわからないかもしれないけれど、本人の中では変化があれば、ありだと思います。そこにいて満足してしまう、通過しないということも考えて、通過しない受け皿なのか通過型の体験の場所なのかと言ったら、ここで考えたいのは通過型の体験の場所です。

そこを体験したをどうしたいかというので、私が関わった人は家にいました、グループホームで暮らしました、一人暮らしを体験しました、家に帰りましたなのですが、最初に家にいた時とそれを通して最後に家に帰った時とでは家族の環境、生活のスキルが全く違います。

それを考えると、今ここで、(3)の話題の中で提案していきたいのはそこに留まるのではなくて、次のステップを考えていけるような柔軟な対応ができる何かです。そのことを通して、そういう状況の方に対する支援スキル、ノウハウ等を構築できるような何かです。

何かという言い方はふさわしくありませんが、例えばそのことを研究するとか仕組みを作ることに對して、私達の仕事はサービス提供ありきの報酬体系になっているのでサービスをしないと報酬は入りません。仕組み作りに報酬は入らないので、そういう意味ではそういうことを研究できるような場があれば、これから必要かなと思いました。

(委員)

・精神なので、当事者に何がしたいのという問いかけもすごくしてほしいです。皆、自尊心が強いです。成人してからの発病が多いので、立派に仕事をしていた時代があるから、今更、作業所には行けない等そういうことを言われる方も多くいます。

引きこもりの人というのは私が思うには、どこにも繋がっていない人、家族とだけで暮らしている人を見ていたら、色々経験を過去に積んだ人は結構います。

そんな人に出ていくと言ってもまず作業所、生活訓練から始めるしかないけれども、自分は過去にこんなことをしていたんだからそんなところへは行けないという方が多いので、その辺の自尊心も保ちながら、その人にあった支援を考えていってほしいです。

(部会長)

・就労移行もそうですが、自分にとってどんな仕事があるのか、どんな働き方があるのかを知るための時間がある人達がいると思います。学校を卒業する時にこういう仕事の間があります、こういう暮らしの間があります、どれが合いますかだけではなくて、自分がどう生きるのかということとか、大人になってから発病、発症された方だと今までの暮らしがあつて、それには自負もあつて、だけど現実の自分があつた時に、次の自分はどうなっていくのかを一方的にこの作業しかありませんじゃなくて、こういうとこしかありません、どれ選びますかではなくて、どうしたら良いのかを考える時間が絶対に必要です。

(委員)

・それが一人では考えられないです。

(部会長)

・就労移行という事業の中では一緒にハローワークに行ったり、セミナーを受けたり、そのエントリーを自分でやったり等色々なことをやりながら自分のできることとできないこと、できる環境とできない環境を考えながら2年かけて就職先を探していく、この考えることがすごく大事です。

(委員)

・生きる希望を見い出してあげてほしいです。働くことだけが選択肢ではないし、楽しくというか自尊心を持ちつつ生活していけたら、苦しまずに、それが一番の目標だと思います。

(部会長)

・それを考える。就労移行は働かないとだめだから、働くことは目的になるから、就労移行ではないです。

(委員)

・それを乗り越えて就労までいければ一番良いです。

(部会長)

・就労移行ではなくて、その前段で今自分がどう生きるかを迷っている、悩んでいる時に一緒に考えられるような関わりが必要です。

それが今言った自由な使い方ができる、時間的な自由な使い方や回数的な自由な使い方、活動的内容の柔軟な対応というのが今の制度では地活になるのですが、地域生活支援拠点と言うのだから体験という言葉に含まれるようなものも、そういう機能が考えられないかということです。

(委員)

・納得したら、ものすごく頑張る人ばかりです。

(委員)

・今はサービスはないのですか。

(委員)

・相談とかはありますが単発ばかりです。継続支援が一番必要です。その人の変化をちょっとずつ見ていき、回復に繋げる、そういうのが大事だと思います。

(部会長)

・また行くという気持ちになりにくいというのもありますね。

(委員)

・また行っても何もないという感じです。また来てくださいとか、話を聞いてもどうしようもないねと言われたり、できるだけ離れて、見ないようにしなさい等しか言われません。合う薬に出会ってからはずっと良くなってきたので、今は助かっています。症状が落ち着くと本人も人格がぐっとあがるので、あれは何だったのかと思います。持っているものが出てくるんだなというのは実感します。

(部会長)

・治療との兼ね合いもあると思います。治療がうまくいっている時にうまくいっている状態で関わられる地域の福祉がたくさんあれば、出会いの機会が増えます。

(委員)

・こんな言い方は申し訳ないですが、たくさん勉強してもらって、良くなった人の事例を聞いて、こうなった人もいるというのを吸収してほしいと思います。



(部会長)

・経験をきちんと積み上げるような仕組みというのは必要だと思います。

相談ではスーパーバイズをどうするかということが言われています。その話は次の話題になります。

(副部会長)

・ソフト面で例えば就労の体験に行く時に誰がどう付いていくのかという隙間の部分、就労だけではないのですがそういう隙間の支援が必要な場面はたくさんあります。

そこをオールマイティにやってもらえる人がいたら良いなというのは今思いました。

(副部会長)

・キャンパスの企画で年に5回ぐらいカラオケ大会やおやつ作りをしています。

とっかかりとしては特に若い世代の子達はきっかけがなければ外に出れないとか、何かきっかけがあれば行ける、知った人がいるところには行ってみようという気にもなるという形で、なかなか出るきっかけがないところから、とっかかりを作るために始めました。

初めはカラオケ大会も1回目2回目とどんな感じかなと思ってやってみたのですが、それが反響で一人増え二人増えという形で、一回来るともう一回来てみたいな感じで参加はしてくれるのかなというのがあります。そこで終わらずに次の仕掛けとして、その人達がこんなことをしてみたいということに対して、こちらが仕掛けたことに対して次の仕掛けとしては何かやってみたい、もっとこんなことに対してやりたい人はいないかという形でどんどん繋がりを広げていくことを考えていける場ができれば良いということです。それはどんな障がいに関わらず、やってみたいという人がこの指止まれ方式でも良いので、やっていったら良いのかなと思います。

社会福祉協議会が地域福祉をやっているような活動等を色々合わせて考えた中で、一つのきっかけから物事を広げて、皆で作りに上げていくような場ができないかなと思いました。

(委員)

・重心の方、知的にも身体的にも重度の方で医療との連携もかせないというような人が自宅以外で家族以外の人達と過ごすことのリスクはすごくあります。ショートステイも頑張っていくのですがなかなか積み上がらない現状があると思います。毎回のように全く寝れませんでしたと言って帰って行かれます。自宅で家族以外の人と過ごすというところも体験の一つとして機会があれば、もうちょっと将来が家族も本人も見通せるように思います。

うちの生活介護や就Bですが、そこしかサービスとして繋がっていない方も多くおられます。

将来的にこの地域で暮らし続けることを考えた時に点ではなく面で支えていけたらと思いますが、そうすると一事業所だけでは抱えきれないケースが多々出てくると思います。

他事業所と繋がることも意識して、一つの事業所だけで完結するのは現実的ではなく、その人にとってもううちの事業所以外の人達とも関わる経験や日中過ごす場所以外での生活の経験をしていけたら良いなと思います。

家族もその必要性というか将来的に子どもの自立をなかなか思い馳せにくいというか、そういうケースもあると思うのですが、こちらからどうアプローチしていくかも課題として持っておかないといけないと思いながら聞いていました。

(委員)

・家族と過ごす場しかない人とか、一人でそこに出てきて次に何したいという人と様々なので、そうい

う人が一緒にいる場を一つ作るのか、色んなところにそういう場を作って繋がるものを作るのか、と二人の話を聞いていて思いました。

障がいの違いが大きすぎて、それを一つのところで全部完結できるような場を面で支えるのか、ひとつ繋がれば次はここでしようよと言って行ける人もいるだろうし、一つの面で人はじっとしているけれど周りが動いて色んな人が関わっていく方法もあるので全然考えが付きません。

(部会長)

・この圏域で大前提として、地域生活支援拠点という何もかもを兼ね揃えたひとつ拠点があって、一法人がそれを全部やりますというのは圏域の実情から考えれば違うというのはここ何年かの話の中であります。この圏域の中にある事業所やそれぞれの支援のノウハウや色んなものを活かしながら面的整備ということはずっとやってきていると思います。その中に新たに立ち上がってくるものも全部含めながら、面的整備をしていく時にノウハウの積み上げや支援の見立て、ネットワーク等そういうもの、つまり直接支援をすることだけではなくて、その準備や報酬単価に反映されないようなものが絶対に必要です。体験をどう組み立てていくかというのは体験はあまりにも広いし、状況があまりにも違います。

例えば重度の知的障がいと重度の障がい特性があって環境が変わるのはとんでもないから、でも家族以外の人と過ごす体験というのはしていきたいと言ったら、家でヘルパーと過ごすか、違う場所で家族と過ごすか、二つの要素を一気に変えるのはそれは無理だということも考えなければいけないだろうし、もっと仲間作りが必要だという人もいるだろうし、それを一事業所が一場所が全部を兼ね揃えるのは無理な話なので、こんなものがあるというものをどう仕組みとして持っていくのか、ネットワークしていくのか、ないものは作らないといけないとは思いますが、その時にノウハウはどうなのかというような研究をしていくことが地域生活支援拠点になります。

拠点と言ってしまうと場所になりますが、考える核というかチームというのか、何かそういうことかなと喋りながら思いつきました。我々も柔軟な視野を持たないと、何かそういう場所を作りますとかではいかないと、今の話で思いました。

具体例はもっと研究しないといけないというのは皆さんの話から思うところです。ひとりひとりも違う、障がいの状況も違う、同じ障がい名であっても程度も違えばその積み重ねによっても変わってくるので、それを考えないといけないと思います。

(委員)

・行政の中でもこういう体制を作っていくにはどうしたら良いかという話が出た時に、例えば緊急時の対応でも部会長と副部会長という形で繋がりの中でできてしまうことというのは多々あります。

ただ30年後、同じメンバーかといえば全員違うと思います。その仕組み作りのところやこういう考え方をしたからこういう機能が必要だということの整理をしていかないと、結局使われなかったとか、結局繋がらなかったという話になってしまうかも知れません。

作るのであれば仕組みにしろ、箱にしろずっと使えるもの、活用ができるものを考えていかねばなりません。そういう意味では考える拠点というのはなるほどという気はします。

(部会長)

・何となく漠然としていたものをだんだん明らかな形のあるものにしていくのがこの会だと思うので、そんな感じで文章化しながら、この文章をどう残すかが次の活動をどうするかということなので、そういうことにしていきたいと思います。

(4)の専門的人材の確保・養成ですが、これが本当に大変でとにかく人材不足、人手不足というのはどこでも言われていることです。

都道府県の研修でも「強行」も「サビ管」も全部色んなところで研修もされていますが、応募者数の方が受け入れ数よりも多く、強度行動障害の研修は3分の1ぐらい断っています。

支援の質をあげるための加算の要件にもなるのでどこの事業者も研修を受けさせたいというのがあります。都道府県がやっている研修もキャパが満杯というところで新たな人材を確保すること、今いる人材を辞めてもらわないこと、今いる人材のレベルアップを図ること、という3段階があると思います。

この辺のことは議論をするというよりはノウハウの積み上げであったり、講習会や講演会がたくさん開かれていて案内がたくさんきます。ところがどれも同じ時期に重なったりすると人手が足りないので職員を行かせられない状況があります。

1個にまとめてやってもらえたら受けやすいということもあるので、人材育成の支援のノウハウを積み上げることも大事ですが、人材育成のノウハウを積み上げることもすごく大事だという気がしています。積み上がりにくさもあったりするのかなとも思います

(委員)

・外国の方の介護の分野がありますよね。そういう考えはないのですか。

(部会長)

・この圏域はないです。京都はイエス団のあいりんがそうです。多国籍の支援者が多いです。

地域柄とかその法人の今までやってこられている活動の広がり方等があると思います。

強度行動障害の研修も出て来られる時に、普段のやり取りは日本語でできるけれど、書いたり等は配慮が必要で、コミュニケーションのところで議論していくのには配慮が必要な場面には遭遇しています。

(委員)

・そういうのもこれからは考えていくのもありかなと思います。乙訓でも外国の方がたくさんいらっしゃいます。そういうことに興味を持って頑張りたいという方もいらっしゃると思うので、積極的に乙訓でも受け入れをして人材育成をしていけたら良いなと思います。

(部会長)

・子どもの現場で言うと、利用者で外国籍の子は結構います。

逆に言えば、居てもらうと助かる場面もあると思います。

(委員)

・素朴な疑問ですが、何で辞めてしまうのでしょうか。

他の介護系の事業所と障がいのこの部分をできないかという話をすると金じゃない、人がいないと言われる。でそこまでいないのだろうと思います。

(部会長)

・やっぱり給料が安い。それと安定しません。

障がい福祉サービスの報酬というのは3年毎の報酬改定があるので、事業によっては収入が大きく変わります。人件費を上げてしまうと追いつかなくなるので、その不安感が経営者側にあるからどうしても人件費は抑えめになります。処遇改善費等色んなものがあるって一生懸命計算してちょっとでもと思いますが、事業所側の持っている状況に合わせてしかもらえないから、シンプルに給料が安いというのは本当だと思います。

これは長年続けている側の責任かもしれませんが、やりがいというところの責任とやりがいで言うと責任の方が重くて、やりがいを感じにくい、難しさ感が立つみたいなどころはあるのかもしれません。

(副部長)

・外国人の方を雇用するというのはすごく良いと思いますが、その外国人を教えられるスキルはうちにはないと思います。受け入れるのは良いのですが、教えていけないから雇えないというのは現場にはあるかもしれません。視点としては良いことだと思います。

(部長)

・就いてもらう仕事にもよると思います。

相談業務に外国の方は言語がツールになるので厳しいかもしれません。

(委員)

・この頃は来る前に勉強されている方もいます。一年、二年日本語を勉強してからこちらに来るという方もいます、その方と割にコミュニケーションがとれるので、全く初めての方だと確かに大変ですが、割と今は勉強されている方が多いと思います。

(部長)

・希望している人が来ていると思います。外国の方向けの介護の専門学校等ともしっかり積極的に何かをやるというのであれば、それは探っていく余地はあると思います。

地域生活支援拠点ということ考えた時にそういう研修等についても少しコーディネイト業務みたいなこと、たくさんある情報をちゃんと整理して、効率良く皆で動いていくということは考えていかないといけないと思います。

他業界ではコンサルがあったり、人材派遣の会社がヘッドハンティングをしながら動かしていたりと色々なことがあるのだと思います。

福祉業界はあまりそういうことがされていなくて、良いのかどうかもわからないけど、地域としてのコーディネイト、それぞれが別個にやるのではなくて全体像を掴んでいくという作業をどこかがやれないかなと思います。研修に関してもそうだし、お祭りのようなイベントに関してもそうだし、ここに行けば情報があるという、整理された情報が入ってくるというような機能はあっても良いのかなと思います。逆にそのことを活用してそれぞれの事業所がより効率良く動いていくことも考えたら良いのかなと思います。自分のところがあえてやらなくても良いことも、交代でやっても良いのかなみたいなことのコーディネーションというのはいるのかもしれないと思います。

(委員)

・責任の大きさとやりがいということで、そのバランスというか、今の若い子はちょっとしんどくなったらすぐに辞めてしまったり、人間関係で辞めてしまったりもすると思います。でも、お母さん達と長く関わっているからこそ色々なことを話してもらえたり、聞かせてもらったり、しんどさも共有できたりというやりがいみたいなものがなかなか積み上がらないというのがあってと思います。

また内部の中で人を育てようということだけではなく、乙障協や事業所間の連携の中での共有みたいな話も管理者が意識的に出すということ、業務で行けぐらいの感じでやっていかないと上下関係だけで整理するというのは難しいと正直思っています。

そのような関係性を組織の中だけでなく、横の繋がりの中で積み上げていくのかということをおうちの法人としても仕組み化していかないといけないと思っています。

(委員)

職場体験等を受け入れるのは難しいですか。今、保育所等によく監査に行くのですが中学生が10名ぐらいで職場体験をしているのによく出会います。そういった形で若い時の職場体験で若い方に興味を持ってもらうというような形、若い子を見ると大変な現場なので体験する学生等の確保は大変だと思うのですが、短大等どこか受け入れておられるのですか。

(委員)

・実習生と中学生の職場体験は受けています。

できるだけポジティブなイメージで書いていただいた方が良いと思います。

(部会長)

・昔はボランティア活動が盛んでした。大学生になってもボランティアサークルがあったのですが、年々メンバーを集めるのが大変になっています。

もう一つは保育や教育関係の資格を取る子達は福祉実習があります。福祉現場実習に行くと本当は教員や保育所の先生になろうと思ったけれど障がい者のところも良いなあ、障がい者施設で働きたいなあという子が増えてくれたら良いのですが、なかなか難しいという感じです。

(委員)

・以前は障がい児学童があって大学生が中心になってやってくれていました。

そこから将来介護等に就こうと行かれた方もいらっしゃいます。

(部会長)

・昔はこの地域のほとんどが、「がんば」か「わっしょい」あがりみたいな障がい児学童のスタッフをしていました。そのまま支援校の試験を受けたり、そのままどこかの事業所に入るといった人がかなりの割合を占めていました。

それがなくなったところで、そういう出会う機会が少なくなってきています。京都市内のトライアングルというダウン症の会とずっと関わっているのですが、そこは花園大学にトライアングルというサークルがあります。そのボランティアサークルが30年前から立ち上がっているのですが、どんどん入る子が少なくなって、他大学の子も入れた形で動いていますが減ってきています。

今は大学の授業がめちゃくちゃ厳しく、絶対に出席しないとイケないというぐらい学校の様子も変わってきています。学生が現場に出てきてくれなくなったという現実と、生活に困難さを持っている学生も増えてきて、アルバイトがあるからサークルはできないとか、余分な授業はとれないという学生が出てきています。

現場のしんどさも、希望する人達の少なさも、時代の変化みたいなところも出てきていて、どこから解決するのかというのは日々悩むところです。

極力そういうところで受け入れたり、知ってもらう機会というのを増やしたいと思います。

乙訓はそれぞれがフェスタをやってらっしゃいます。フェスタをやって地域の人達に触れてもらえる機会をものすごく作っていると思うのですが、なかなかそれが結びついていきません。時代のせいにしてはいけないのですが、もったいないと思います。

出会ってもらえる機会や興味を持ってもらえる機会は増やしていきたいということも含めると地域生活支援拠点というのは地域の中でどうやって動いていくかを考えることが大事なのだと思います。

それが(5)の地域の体制づくりというところに繋がっていくと思います。

家族会等色んな会があると思います。最近、色んなサービスが増えてきてから、「わっしょい」や「がんば」等が活動をやる頃とリンクするのですが、親御さんたちの中に一定の期間を過ぎると役員が回ってくるから会を辞めたという声を聞くことがあります。家族会等そういう繋がり感じはどうですか。

(委員)

・親御さんも年齢がいくと色んな取り組みに参加すること自体が難しくなるので、それで辞めるというのは聞いたことがあります。

(部会長)

・最近の若い人はあまり入らないとかは。

(委員)

・学校の方があられるかもしれません。保護者会やPTAとか。親御さんも働く方が増えています。今は働いておられるので、子どもを預けるために放課後等デイが使われたり、その辺りも変わってきていると思います。

(部会長)

・(5)地域の体制づくりのところと言うとサービスを提供する場所、サービスがもらえる場所だけではなくて、自分達であんなことがしたい、こんなことがしたいと当事者の人達同士が活動できるようなことへの支援もいるだろうし、一方で家族の繋がりとかがしやすくなります。色んな自助グループ等へのお手伝いができるような機能や視点というのは必要だとは思いました。

(委員)

・お手伝いというのはして下さる方ですか。

(部会長)

・地域整備ということで項目にあがってきた時に、ここに行けば何かしてもらえるとというものだけじゃなく、そこで自分達で何かをするみたいなことです。

(委員)

・わかります。私達は十分にやっています。毎月やっているのが役員会に例会に家族相談会、別に月2回はサロンを貸りてやっています。例会等ではたくさんはできません。皆すごくお喋りがしたい、聞いてほしいので月2回サロンをやっています。それも6畳一間に十何人も来て所狭しと、そこは気も使わなくて良いと言って必死で来られます。策定委員会のヒアリングがあったのですが、訴えたのが場所がほしいということです。どんな狭い場所でも良いから週一でも貸してもらえたら助かります。

例会も家族相談会も保健所を使わせてもらっています。役員会はバンビオの中でやっています。

サロンも月2回不便なところなので誰も来ないかと思ったら、たくさん来てくれています。そこは長岡病院を通じて、無料で貸してもらっています。

まだまだ必要だといつも感じます。だから、どこか一部屋貸してくださいとずっと訴えています。

家族相談会をしても第一歩というのは家族相談員が良いです。

経験者が研修を受けながら相談相手になって相談にのっています。家族会で辞めていく人は80代後半で、ここに来れなくなった人です。今から支援してあげたいのに、もう来れないので辞めますというのは年々出てきます。

(委員)

・交通の便が良くて、来やすいところに、転々としなくても貸してもらえるような場所があったら良い

ですね。

(部会長)

・逆に、ここに行けばそういう情報があるみたいなのところがあっても良いかもしれません。

(委員)

・家族会に来たら、情報をたくさんもらって帰られます。今、子どもが大変な人は必死で聞いて来られます。

うちの家族会も京都府下でものすごく活発にやっているということで、今度1月22日にくいな橋の保健センターで京都府のケアラーアセスメント票普及・啓発事業があるのですが、それに乙訓やよい会が選ばれて発表します。家族が求める家族支援というのを勉強しにぜひ来てください。

(部会長)

・そういう情報等も、つい福祉サービスの視点でいくと何かを提供しないといけない、何かをしてもらえるという関係性だけではなくて、自分達がすることのやりやすい支援というのも、自分達で活動を作っているというのもそうだし、相談員制度というのも身障も知的もあると思います。

(委員)

・精神はやっと去年認めてもらいました。

(部会長)

・動きやすい何かというのが、実体が全部わかっているわけではないので具体的には言えませんが、この地域拠点整備というのはそういうことも含まれるのかなあ、ここに行けば何の中に自分達がしようとしていること、もしくはピアカンであったりとか、その方が良い場面というのも色んな情報の出し方があると思うので、(5)地域体制づくりの中に地域生活支援拠点事業として何をするのかと言った時に自主的なそういう活動や当事者同士もしくは家族同士の活動を支援する活動も含まれるのかなと思いました。

(委員)

・サロン活動も当事者に来てほしいからずっとやっています。

なかなか当事者が来なくて、親が集まってきています。

(部会長)

・当事者に対する支援とか当事者が行きやすい場所とか仕組みとかということも、さっきの体験ができるところの項目の中にはあがっているけれど、もう一方でそういう自主的な活動や親御さん同士の繋がりを支援できるような何かというのも考えられるかなと思います。

次回は年明けになります。次回、もう一回文章にして事前に皆さんに流します。その言葉や表現等々について精査をしていきたいと思います。後である程度これを直したものを確認するというのでいけそうであれば、次回が最終回ということにします。もう少し議論がいるということであれば、もう一回年度内に開催させていただく方向でいきたいと思います。

次回は根をつめた作業になるかもしれませんがよろしくお願いします。

次回定例会：1月28日(火)10時から